

講談「わが心なぐさめかねつ」(前編)

多谷 昇太

「わが心なぐさめかねつ更級や姥捨て山に照る月を見て」。

古今和歌集に詠み人知らずで記載されているこの名歌、後に更級日記の題名にも使われ、また大和物語の説話ともなりました、現在の長野県、千曲市にございませす冠着山(かむりきやま)を姥捨て山に見立てて詠まれたものでございます。慰めかねた内容が本当に姥捨てにまつわるものかどうか定かではないようですが、大和物語の説話以来、その筋書き通りのことと今ではなっているようでございます。

嫁に責められて老母を山に捨てた男が慚愧の念に堪え切れず、また母への愛にもさいなまれて、ふたたび母を連れ戻すというお話ですが、この説話内の人と時代を変えまして、また現代の世知辛い世相にも絡めまして、一部史実をまじえての講談といたしました次第。どうかごゆるりと御静聴のほどをお願い申し上げます。えー、なお、それならば中身を変えたりせず、大和物語をそのまま講釈すればいいではないかと、御指摘の

向きもございましょうが、しかしそれではわたくしの講談創作の才能がおおやけになりません。また、講談内に有名な、エンターティナーを登場させませんと今日日皆様方のお耳も引けず、引いてはわたくしの懐具合にも関係してまいりますので、えー、その有名な人のお力をもお借りした次第です。その方が誰であるかは、こうして講談を聞きに来られるような、教養にあふれた、皆様方のような方でない限り、あるいは御存知ないやも知れません。(腕時計を見るふりをして)約三十分後にその方の名をお知らせします。待たせません、私は、はい。要するにすぐです。

えー、ともかく、「新大和物語」とでも称すべき、名作へと、わたくしの力量をもちまして、作り変えさせていただきますました次第でございます。蛇足ながらひとことまで…。

〔張り扇一擲〕さて、時は神護景雲(じんごけいうん)四年西暦七百七十年のころ、九州は筑前の国、大野の里に、山科則子というその年七十二になる老婆が一人侘しく庵を結んで居りました。とても家とは云えないあばら家に、でございます。果たして世話する身寄りもないのか、もし人がこれを目にするならば他人事とは云え気に掛かり、不憫に思わない者はいないでし

よう。さてしかし、この疱瘡病みのあとの残る、今でこそ見る影もない老婆となり果てた山科則子ですが、往年は奈良の都で大伴旅人に女房としてつかえ……ほら、この人ですよ、先程の有名人というのは。（観客の誰か一人を目でつかまえて）御存知ですよ？大伴旅人。え？ 知ってらっしゃる。さすが！さすがは講談好きの御歴々、私の目に狂いはなかった。よかった。やりやすい……。えー、もつとも話の主役はその旅人の息子の方、大伴家持の方で、このあと則子の方やの主役として登場して参ります。とにかく、その山科則子。往年は旅人の奈良のお屋敷で、息子の家持の乳母（めのと）として仕え……えー、度々で恐れ入ります。が乳母って御存知ですよ？乳の母って書いて、要するに乳母（うば）です、乳母。実母に代って子にみずからの乳を与え、のみならず躰け教育万端を授ける存在でした。ですからどちらの格式あるお屋敷でもござって人格に優れた、教養のある、優秀な乳母を欲しがったわけです。逆に云えば大伴氏ほどの名家に乳母として仕えることの出来た人物であるならば、その人品は推して図るべしということ。則子さん、優秀だったわけです。えー、とにかくその山科則子、奈良の都の旅人の屋敷で乳母として仕えながら、同時に佐伯

（さえき）輔経（すけつね）と云う方の側室に収められた方でもありました。要するにこちらは輔経の本当の女房だったわけです。同じ女房でも仕事、司名（つかさめい）としての女房と、現代では奥様方はみんな女房ですから、ひとつお間違えのないように……。えー、とにかく、その輔経との間に一子為輔（ためすけ）をもうけましたが、やがてその子が元服する頃に輔経が亡くなりますと、御正室との間で遺産をめぐる一悶着をおこすこととなります。すなわち遺産のほとんどを御正室とその嫡男が相続してしまい、則子親子にはほんのお義理程度、これでは則子親子は生活して行くことが出来ませんでした。まあ今で云えば弁護士税理士を立てての遺言がどうしたとか云う、あれですね。裁判沙汰になることもままあるようですが、この時代にはそんなものはありません。「やらないよ！おまえなんかに」の一言で、それぞれの家の力関係ではなにかねませんでした。則子の実家は佐伯家よりは遙か格下、およそ御正室家に逆らえた義理ではなかったのです。そこで、思い余った則子は一子為輔を都に残して、はるばると九州は大宰府まで旅立つこととなります。えー、ちょっと話が飛びますが、則子が乳母として大伴氏に仕えていたのは息子家持が元服するまでの十

余年、その後大伴旅人は九州は大宰府に左遷され、則子との縁は切れていたわけです。しかしかかる事情を得まして万止むを得ず、かつての主君大伴旅人を尋ねて行くことになった次第です。則子が嫁いでいた佐伯家は嘗て大伴氏の郡司（ぐんじ）を勤めていた謂わば家来、ならば旅人の命令には従うだろうと則子は踏んだわけです。いまはもうこれしかないかと腹を括るや、後に残す為輔の当面の暮らしをととのえ、女身ひとつで遙か九州へと落ちてまいりました。さて然るに、都に残した未だ子供に過ぎぬ為輔を思いわずらいながら、また長旅の艱難辛苦にも堪えながら、ようよう九州は大宰府まで来てみれば、思いも寄らない旅人の姿を見せ付けられることとなります。当時愛する妻郎女（いらつめ）を失くし、脚には腫瘍を患い、また自分を都落ちさせた宿敵藤原氏の策謀にも長年思い煩って、往年の覇気をすっかりなくしていた旅人は毎日が酒浸りの為体（ていたらく）。嘗て都で我嫡男家持（やかもち）の乳母（めのと）を勤めてくれた則子との再会を大いに喜びましたが、もはや佐伯家を諫める気力も、力もありませんでした。奢る藤原の前に自らの氏一族の存亡さえ危ぶまれる始末なのです。しかしかと云つてこのまま則子を無下に帰すわけにも行かず、酒でま

わらぬ頭を必死に働かせた末一計を案じました。すなわち則子をこのまま帰さずに大宰府女官として召し抱えることにしたのでした。そして則子の一子為輔を、今はまだ都にあつて中納言の地位にあり、親交のあつた石上高嗣の養子にと図つたのであります。山科の名は消えるとは云え為輔の将来と則子の身を慮つてのこととございました。我子との別れは身を裂かれるほどの痛みでしたが為輔のためとさす旅人の言葉には逆らえません。泣く泣く則子は以来大宰府の人となつたのでございます。

さて光陰遅からず、それから三十七年の時が流れて、その後いつたい何がどうして則子が斯くも落ちぶれ果てたものか、また我子為輔のその後やいかに。哀れ、母と子の愛惜を明かすべくこれよりの講釈となる次第でございます……。

〔張り扇一擲〕神護景雲四年西暦七百七十年の、ようやく日の暮れた、ある初秋の宵のこと。庵にたたずむ則子の耳に遠く馬のいななきが聞こえ、ややあつて庵に近づく人の足音が聞こえてまいります。あたりには則子の人生の黄昏を告げるかのように、虫の音が寂し気に鳴り響いております。

「戸を叩く音」婆殿、婆殿、おられるか」

「(やや間を置いて不審気に)どなたです?こんな夜分に」

「私だ。家持だ。あなたにいい話を告げに来た。戸を開けて中に入れておくれ」

「え?若様?……はい、はい、ただ今すぐ……」

立てつけの悪くなつた敷居を軋ませながら則子が戸を開けますと、そこには今は亡き旅人の息子、大伴家持の案内(あない)を乞う姿がありました。

「まあ、若様!なぜこのようなあばら家に……お呼びくださればこちらから参上いたしましたのに」

「(軽笑)相も変わらず若様とは。五十五の男をつかまえて。家来どもの手前もあるではないか(軽笑)。まあ、よい。それはさて置き、ちと訳ありでな。こちらの方が都合がいいのじゃ。悪い話ではない。とにかく中にに入れておくれ」

「は、はい。でもこのようなむさくるしい所……あまりにも心苦しゅうございます」

「かまわぬ。とにかく中で……」と云つてどこか急ぐ風情の家持が後をふり返り、「お前たちは離れたところで控えておれ」とお付きの警護の兵二人に申し付けます。そのまま「では」とばかり招じ入れた則子がお茶の支度をしようとするのに「いやいや、お婆、構いま

すな。わけあつて長居はできぬ。まずはこれへ」と則子を眼前に座らせませす。

「実はな、お婆、急な話じゃが此度私に勅令が下りましてな、この十日の内に奈良に戻らねばなりませんのじゃ」

「まあ、都に……して、それはいかなるお上のお計らいですか?また御所に戻れるのですか?」

「うむ、左中弁としてな」

「まあ、左中弁。それはおめでとうございます。旅人様もきつと草葉の陰でお喜びでございましょう。これでやつと地方のお役目から解放されるのですね?」

「ああ、地方のドサ回りもこれで終りじや(軽笑)。しかしそこでじや、お婆。私はそなたをも都に連れ行こうと思う。いかがじや?そなたも寄る年波、いつまでもここに一人では居られまい?」

「いえいえ、めつそももございませぬ。わたくしのような醜い瘡瘡上がりの古女房が、お側でお仕えしては。お家の沽券にかかわります」

「仕えろと云うのではない。私の元で余生を送つてほしいと申しておるのじや。乳母のそなたを此処に置いて行くなど、それこそ沽券にかかわる」

「いいえ、どうか私など捨て置いて、心置きなくお立

ちくくださいませ。此度の都上りの儀、まことにお慶び申し上げます」

と、結構な家持の申し出をかたく固辞する山科則子、なにやら自分からは面と向かつて云えぬ、隠れた経緯があるようです。それを家持が代弁いたします。

「お婆…例の、道鏡の儀か？彼の恵美押勝（えみのおしかつ）の乱でそなたの山科家が連座した、それへの道鏡坊主の報復を恐れてのことか？」

「私からは云えませぬ……」

恵美押勝の乱とは天平宝字八年西暦七六四年、女帝孝謙天皇の不興を買った恵美押勝、別名藤原仲麻呂の起こした乱のことですが、要は女帝をめぐつての男同等の争いに押勝が道鏡に敗れた末のことです。道鏡の魅力が勝っていた？……のかも知れませんが、それはともかく、その道鏡による押勝一党への肅清が続いていたのです。一説によれば四十人あまりが刑死、流罪になったとのこと。則子は自分はともかく、その累が眼前の家持や我子為輔に及ぶのを恐れていたのです。「困ったお人じゃ。気にせんでいいと云うに！道鏡と云えど人の子、そなたのような媪までは手にかけてまい。そなたのお子、為輔殿も今は石上家の人間、お沙汰はない筈じゃ。そもそもこの地大宰府でそなたに巡りお

うた時以来、何度も口繁く、庵住まいなど辞めて我邸に参れと云うに頑として聞かぬ。則子殿、そなたは身を引き過ぎる」

「あいすみませぬ。旅人様以来身に過ぎる御恩をいただいてまいりまして……これ以上、この世に要らぬ婆奴のことでご迷惑をお掛けすることは、この則子、心外のかぎりでございます」

「馬鹿なことを。誰が迷惑をかけているのです？乳母のあなたに孝養を尽くさせぬ方が私にはよほど辛い。世間に後ろ指を指されることになる」

「お許しください」

「婆殿……やはりあなたのお子、為輔殿を気使うか」

「為輔のみならず、若様、あなたのことが……どうかお許しください（泣く）……」

「わかりました。もはや云いますまい。お気を静められよ。それでな、婆殿、実はいまひとつ大事なことを伝えねばならぬ。今よりひとつきの後、私の代わりに大宰府少弼として来られるお方が、実は石上高嗣様なのじゃ」

「えっ!?高嗣様が？ここに……?」

「さよう。のみならず、今は石上家家令のあなたのお子、為輔殿も随行されるとの由、本京都よりの伝令の

書の中に、高嗣様自身の手紙としてあつた。婆殿、為輔殿が来られるのじゃ、ここに！」

「た、為輔が……こ、此処に……（感極まつて泣く）」
「婆殿、嬉しかろうの？お子とは何年ぶりの再会となるのじゃ？」

「はい、かれこれ三十五年ともなります。私が始めてこの地に来たのが為輔が十三才の元服の折り。その二年後に旅人様御帰京の折り、どうして居るかと思居たまれず私も随行させていただき、それ以来でございます」

「ではその時になぜ止まらなんだ。石上様や、まして為輔殿に誘われなんだか？袖を引かれたらうに」

「（軽笑）高嗣様のお蔭をもちまして為輔はすっかり石上の子になつておりました。恨み半分、涙半分の目で私を見ておりましたが、何をか申せましよう。これでもいいのだ、ありがたいと高嗣様に手を合わせ、以後をたのみつつまた戻つてまいりました」

「（つい涙ぐむ）辛かろうの？則子殿。我父旅人の仕打ち、お許しください」

「ま、何を申されます。旅人様、若様の山をも越える御恩、この則子いつの世も決して忘れません。どうか、どうか若様、お泣きあそばすな……（と云いつつみず

からも涙ぐむ）」

と思わず家持の手を取り、肩に手を掛けていとおしむ則子でありましたが、その姿は傍目から見れば母が子をいとむ姿以外のなにものでもありません。實際則子からすれば我腹を痛めた為輔のみならず家持も我子であつたのでしよう。方々の家持にしてもさすが後々の世までも名歌人、また万葉集編纂の君と尊ばれるお人、その人の情を知る姿には深く頭を下げざるを得ません。これに比べてでは実子為輔の方はどうなのでしょう。母の心を知っているのか、はたまた自分を捨てて行つた薄情な母などとまさか思つてはいはすまいか、他人事とは云え気にかかるところでございます。

「あいや、すまぬ。つい不憫をもよおして（軽笑）。そう云つてくださればこの家持気がやすまります。しかしな、お婆、なお気に掛かるはその為輔殿じゃ。聞けば大宰府からのそなたの都度の贈り物（※これが当時の金に当たる）、手紙に対して以前は返事をくれていたそうじゃが、三年前、この地で思はずもそなたに再会した時以来、もしくはその前からか、ぶつりと手紙ひとつさえよこさぬそうではないか。まさか押勝の儀、道鏡の儀を慮つていはしまいか、それが気になるのです。もしそうであるならば婆殿、ここはやはりこの私

と都に戻るのがよくはあるまいか。これ以上そなたに辛い思いはさせたくない。あなたの一生を捧げたそのお子から、もしやつれない言葉など掛けられては、この家持いたたまれない。かなうなら私の介在を得て、お二人の再会をはたしたいのじゃがどうか。行く行くは奈良の都で親子水入らずの暮しを図ろうほどに……」

「あいや、若様、為輔から手紙が来ないのも無理はありません。十五年前はしなくも疱瘡にかかり、私は伝染を恐れて人里離れたこの庵を得ました。以来こちらからは何も、連絡さえもしていません。奇しくも三年前この地に赴任された若様とお会いし、若様から私の無事を聞かされてさぞや驚いたことでしょう。またおおせの押勝様の儀も確かにこれあり、為輔からの音信なしとも私は意に介しません」

「じゃが、それならばなお、為輔殿はそなたを気に掛かねばならぬはず。御無事であったと知ったなら……。年は私と同じ五十五と聞く。ならば委細わからぬはずはあるまい!？」

「若様、どうぞ為輔奴を広いお心で見てくださいませ。母が拙いばかりに家を変え、名を変えて、どれほど心細く、なさけない思いをしたことか。大人になつてか

らも石上家の意向を常気にせねばならず、消息知れぬ母がいきなり現れたとて何をか致せましよう。この間若様から聞かされた、為輔の嫡男が此度石上傍系の家に入婿(いりむこ)するとの由。ならば今更の乞食(こつじき)然とした母の出現が、どれほど心苦しいことか、私にはよくよくわかります」

「溜息ひとつ) 私にはわからぬ、わからぬ。子が親に孝養を尽くすのは当然のことではないか。ましてあなたのような、御自分のすべてを捧げたような母であるならば……遺憾ながら高嗣様御一行はすでに奈良を立たれたと聞く。向こうで私が会つて、為輔殿の人品を量ることもできぬ。それが無念じゃ」

「おおせのこと、万端ありがたく承りましてございませ。それを踏まえた上でなお為輔を待ちとうございませ。この眼で見、この耳で聞いて、我子為輔の形を確かめとうございます。不足があるうともすべては私の責任。それを受け入れてあげたい。どうか若様、則子奴の最後のわがまと思つて、お聞き届けのほどお願い申しあげます」

「相判つた。つくづく感じ入りました。まこと為輔殿はよき母をお持ちじゃ。心行くまでお子との再会を果たされよ。高嗣様もあなたを見たい、会いたいと書に

認められていた。彼の方とも心行くまで語り明かされるがよい。なお、そなたへの封戸（ふうこ※貴人に食と労力の提供を義務付けられた農民、下人。貴人に禄として与えられる）は……」

と云いかけたところで庵の前から人のせき払いがいたします。

「（咳払いの声）」

「何じゃ」

「は。唯今大宰府より使いの者が。新羅特使の歓迎の宴、整いましたとのこと。至急お戻り願いたいということでございます」

「よし、判った。馬を引いてまいれ」

「は」

「（軽笑）いや、お婆、帰京の前に私も何かと多忙でな。ゆつくりそなたの話を聞くこともできぬ。私なきあとの暮らし向きは今と寸分違わぬよう、適当な数の封戸を付けて置く。身がきつければいつでも大宰府へ参れ。その旨監の役人に申し付けて置いた。また時々ここに見廻りに来るようにともな。だから何も心配は要らぬ」

「お心使いのほど、最後までありがとうございます。都でのさらなる御栄転のほどをお祈りいたしております」

「うむ」

戸を開けて表に出ると手綱を引かれた駿馬と、さらに騎馬数騎が控えております。金覆輪の鞍、厚総（あつふさ）、鞞（しりがい）の赤も夜目にあざやかな駿馬にまたがると、見送りに出た則子にいまひとたび鷹揚にうなずいてみせます。

「若様、どうかつつがなく。お幸せに」

「最後まで若様か（笑う）。ではお婆、いや母様、おさらばでおじゃる。いつの世もまた孝養つかまつりたし。では」

掛け声勇ましく腹を蹴ると駒四騎はたちまち走り出し、瞬く間に闇の中へと消えて行きました。あとに残るは蹄の音が嘘だったような虫の音ばかりでございます。空を見上げればいまにも消え入りそうな二十六の月が寂しげにかかっております。封戸を賜うとは云わなくてもそのお百姓が瘡瘡上りの則子を嫌い、また名ばかりの貴人と馬鹿にして、ほとんど何の賄いも手伝いもしないことが則子には判っていました。また見廻りの役人とても家持去つたあとでは当てにはできませんし、まして後任の高嗣を当てにするなど、みずからのプライドからしても、また義理から云つてもできることではありませんでした。畢竟女官時代に為輔への仕

送りを差し引いて蓄えた和同開珎（わどうかいほう）と、衰えたとは云え我が身ひとつの農作業だけが頼りでしかなかったのです。そもそも死を決して庵住居を始めた則子、奇跡的な家持との邂逅と、ここ数年來のその家持から受けた孝養は、所詮夢としか思えませんでした。しかしまだその夢の続きとしてこんどは我息子為輔と会えると思うと、則子の老い身に喜びが走ります。あとひとつきもせぬうちに為輔が来ると家持が云っていました。はたしてそこにはいかなる母と子の再会が待ち受けているのでしょうか。更級ならぬ大野の山に、すなわち姥捨て山に照る月を見るならば、家持ならずとも其の折りの幸を願わずにはおれません。

以上、「張り扇一擲」わが心なぐさめかねつ更級や姥捨て山に照る月を見て」。前編の仕舞いとさせていただきます。どうか後篇にまた、御臨席をたまわらんことを切におん願ひ奉る次第でございます。まずはこれまで。

（次号に続く）

